学図 小国418

文部省検定済教科書
財団法人 教育図書研究会編修

教育学部
資料室

四年生の
国語
中

小KC
G16

学校図書株式会社発行

60303
教科書文庫
6
810
34-1950
01304
49770

寄贈

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449770

昭和二十五年　月

日文部省検定済小学校国語科用

四年生の国語 中

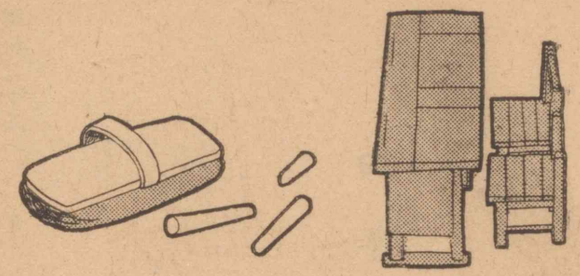
学校図書株式会社

広島大学図書
0130449770

廣島大學
教育學部圖書

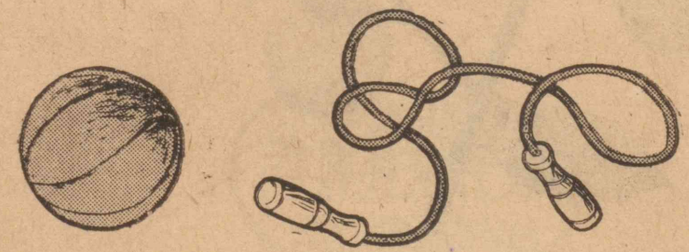
中央図書館

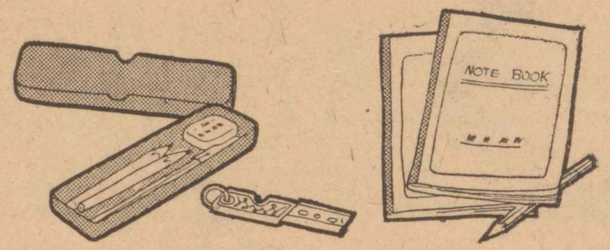
広島大学図書
0130449770



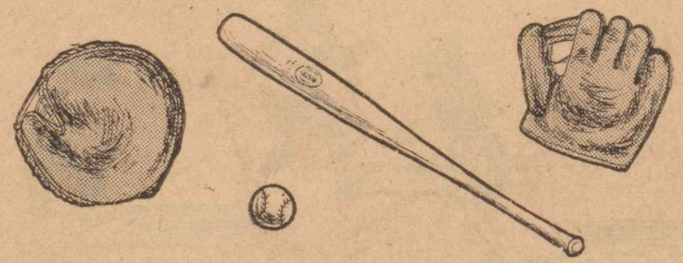
もくろく

一、あけぼの広場……五
(一)焼けあと……六
(二)ぼくらの力で……十
(三)広場のゆめ……十五
(四)かべ新聞……二十
けいじ板……二十
「あけぼの」第一号……二十四
(五)お月見おどり会……三十二
(六)広場はこれから……三十九

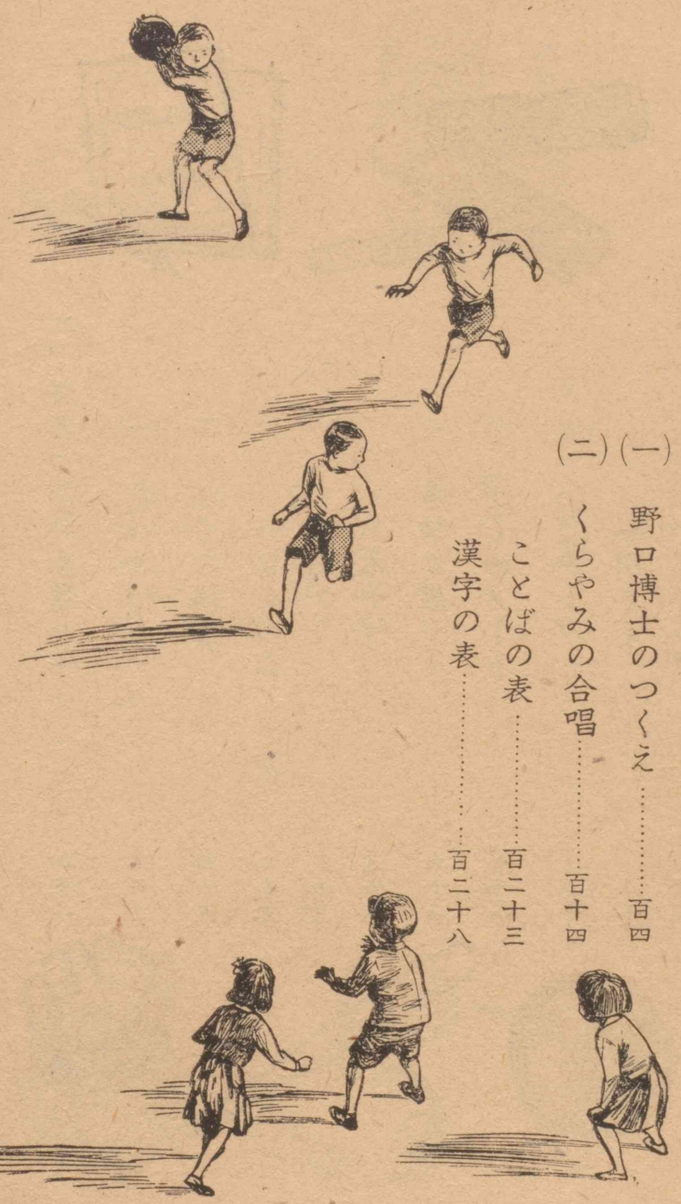




二、深まっていく秋……四十一
(一)赤いはね……四十二
(二)ぼくの読書……四十五
いなかのおじさん……四十五
雨あがり……五十二
おみやげ……五十八
(三)学級文庫……六十一
(四)ぼくのノート……七十一
(五)ハイキング……八十
石川さん……八十
ハイキング……八十五



三、心を打つ話……百三
(一) 野口博士のつくえ……百四
(二) くらやみの合唱……百十四
ことばの表……百二十三
漢字の表……百二十八



あけぼの広場

あけぼの広場は、ある都会のかたすみに住む子どもたちが、自分たちの力でこしらえた広場です。この子どもたちは、この遊び場を作るために、小さい力をよせ集めました。子どもたちは、広場を作って、自分の力に自信を持ちました。自分らの力にものをいわせて、いろいろな仕事をしていくことに喜びを感じました。

広場ができると、つぎつぎにいろいろな計画、大きなゆめがわき起こって来ました。しかし、それは自分たちの喜びを満足させるだけのものではありません。子どもたちは、この広場を中心に自分たちの町をよくしていこうと努めています。そのためにはどしどしおとなの力もかりようとしています。おとなもだんだん動いてきました。この「あけぼの広場」は、みなさんがみなさんの力をよく知って、それを大きくそだてていく上にいろいろなことを学ばせてくれると思います。

(一) 焼けあと

「道路で遊んではきけんですよ」。

「きみたちの中には、道路で、なわとびや、キャッチボールをする人はないでしょう」。

交通安全週間には、よく山下先生からこんなお話を聞いたが、そんな時ぼくは、いつも先生の顔をまともに見ることができなかった。たてこんだ家、小さな路地、雑草とがらくたの焼けあと、ぼくらの町には思いきってボールの投げられる安全な遊び場所はどこにもない。そこで、野球ずきのぼくたちは、ついふらふらと道路に出る。

いちど道路で始めると、ついむちゅうになってきけんをわすれる。自由にとびまわれる遊び場所がほしい。力いっぱい野球の練習できる広っぱがほしい。だが、だれもそれを作ってくれる人はない。

六月ごろのことだった。学校の帰りに五年生の宮本君が、

「お寺の焼けあとが、ぼくらの遊び場になるそうだよ」。

と、どこかで聞きこんできた。ぼくは一年生の時にこの町に来たので、もとここにあったというお寺のことは知らないが、いまは、大きな石ころや、方々の焼けあとから持ちこんだがらくた、それに庭いっぱいの雑草がはびこって、足のふみばもない所になってしまっている。とてもぼくらの遊び場にはなりそうにもない。

しかし、これはいまのぼくらにとっては、たしかに耳よりな話な

ので、それが本当のことなのか、たしかめてみようということになった。でもその日、その話はそれっきりで別れてしまった。その後二、三日は、ついそのこともわすれていたが、もともと遊び場に不自由しているぼくたちなので、こんどは六年生の清川君が、宮本君の話をもっとよく調べようと言いだし、それについては、町のことをよく知っている民生委員の立花さんにきけばわかるということになった。

そこで、清川君、宮本君、ぼくの三人で、立花さんをたずねてみることになった。土曜日の午後だったので、ちょうど立花さんも家にいて、菜園の手入れをしていた。三人はさっそく話をもち出した。

「そうです。あそこのお寺はよそにひっこしたので、そのあとをき

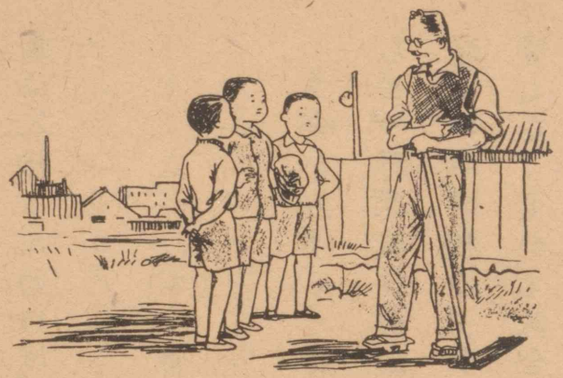
みたちの遊び場にすることに決めてもらった。しかし、町にはお金のいる急ぐことが山ほどあるので、いますぐにきみたちの使える所にはなるまい」。

「では、いつごろできるのですか」。

と、宮本君がたずねると、

「いつってはっきりしたことは言えないね。まあ来年の今ごろできれば早い方だろう。家を建てられたり、道にされたりするとやっかいだから、今からそうした計画にしておくというわけだがね」。

ぼくらは、「もっと早くできるといいのに」。と言いながら帰った。



あとでわかったことだが、町より一だん高いこの場所をこうした計画に入れるためには、立花さんがずいぶん努力されたのだそうだ。

(二) ぼくらの力で

つゆもあけて、夏が来た。一学期の終りには、となりの町の友だちとの野球試合があるので、ぼくらは学校に居残ったり、日曜日は遠くの中学校のグランドのかたすみをかりたりして、しんけんに練習した。しかし試合は十対七でぼくらが負けてしまった。

みんなはまた、よいグランドがほしいと言いだした。でもあのお寺の焼けあとでは、どうにもならない。

たぶん試合のよく日だったと思う。ぼくのうちに集まった五、六人が負けた試合の話をしていた時、清川君がこんなことを言いだした。

「やっぱりぼくらの遊び場所が早くほしい。町のお金で作ってくれるのを待っていては、いつのことだかわからない。それで、この夏休みにぼくらの力で、あそこを半分でも三分の一でもかたづけてみたらと思うが、どうだろう」。

もともと、ぼくらの力ではとてもできないことと決めてしまって、そんなことを考えてもみなかったが、清川君にこう言われてみると、なんだかできそうな気もしてきた。

「五メートル平方でも十メートル平方でもいい、平らな所ができれ

ば、ぼくらのチームはきっと強くなれるよ」。

正面からはんたいする者はなかったが、進んでさんせいする者もいなかった。それはやはりその仕事がとてもぼくらの手におえないことだと思いこんでいたからだろう。

とにかく、いちどていねいに場所を見ようということになって出かけた。橋本君が気をきかしてまきじゃくを持って来た。みんなで計ってみると、たて四十五メートル、横五十六メートル、そばの道路よりは、八十センチメートル高いということがわかった。

それから、手分けして、とりかたづける物をよく調べてみると、東のすみに大きな石材が十本ほどおり重なってころがっていること、れんがやコンクリートのかけらなどが、あちこちにいくところもつ

みあげてすててあること、道から石だんを上がった所はごみすて場になっているが、大きな石はないこと、焼け残りの木のかぶが方々にあること、南のすみは田中さんが畑にしていることなどがわかった。

でも思ったほどではない。石だんを上がった所のごみをかたづければ、十メートル平方ぐらいの場所はすぐできそうだ。

みんなはここで、清川君の計画にさんせいした。たおれた石の門柱にこしをかけて、その仕事の計画を話し合った。

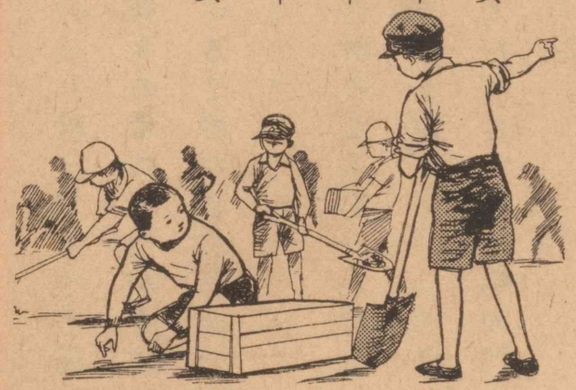
三人の六年生が、立花さんに相談に行っておゆるしをもらって来た。五年生は道具のありそうな家をかりてまわった。四年生は二年

生と三年生、五・六年の女の子によびかけてさんせいしてもらった。

焼けあと作業は、八月三日の朝から始まった。よくれんらくしたので、二年生以上はほとんど全員が集まってくれた。清川君がみんなの前で、作業計画を話した。

一、雑草を取ること　全員
二、大きな石をかたづけること　五・六年
三、ごみはあなをほってうずめること　四年
四、手に持てる小石をひろうこと　二・三年
五、よく地ならしをすること　全員

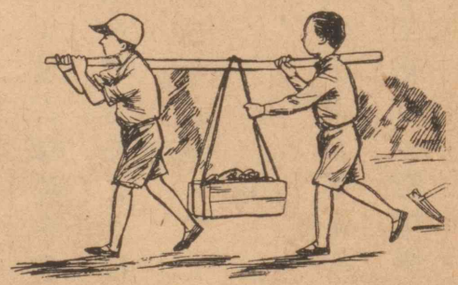
みんな、よくこの説明を聞いて、すぐ仕事にとりかかった。暑い太陽がじりじりてりつ



ける。しかし、みんなよく働いた。作業はおよそ二時間、またつぎの日をやくそくして、第一回は終った。まだほんのわずかしかかたづかないのだが、これなら、きっとこの作業はできあがるという見通しがついてきたような気がする。

(三)　広場のゆめ

わずか三十人たらずであるが、町内の友だちには、まだ名まえも知り合わない人もいた。ところが、十日ばかりのこの作業のおかげで、おたがいが、すっかり知りあって、前よりもずっとなかよしに

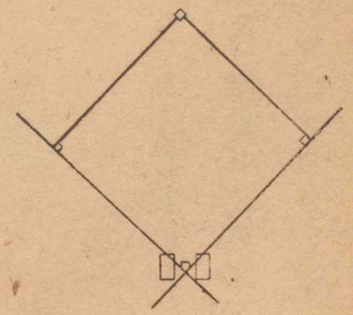


なった。いじわるだと思っていた人がよく働き、ふだん無口の人が、しんせつに二、三年生のめんどうをみているのを見たりして、心を打たれた。

ところで、ぼくらはこの作業をしながら、広場にすばらしい物を作りだした。作ったといってもまだ何も形に現われてはいない。それは今のところ、まだぼくらのゆめかもしれない。しかし、そのゆめは、この広場ができたように、きっとつぎつぎに実現されていくにちがいない。

ぼくらのゆめとは——

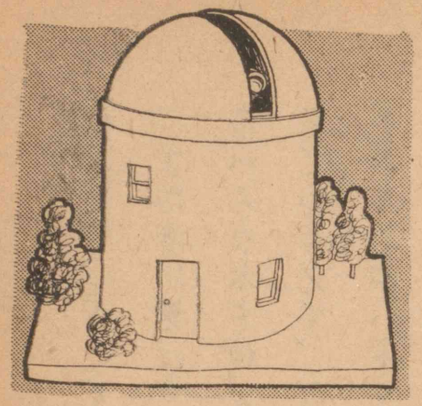
東のすみは野球のダイヤモンドにし、北のすみにはドッジボールコートを作る。これはまず最初にとりかかるつもりである。野球場



としては少しせまい。それで、広場のまわりに高さ二メートルぐらいの金あみをはる。そうすれば、どんなに強く打ったボールでも、飛び出すことはなくなる。

それから、小さい子どもにも遊んでもらうために、すな場・ブランコ・シーソー・すべり台などを早く作る。

ここまではまだゆめの中にはいらないかもしれないが、読書ずきの西村さんの希望する図書館とか、星のかんそくをつづけている中西君の子ども天文台などのゆめは大きい。中西君はもう、天体望遠鏡をすえつけたまる屋根の天文台のもけいを作ったりしている。だんだん空がすんでくる秋の夜、秋山先生をおま



ねきして、ここで星を見る楽しさをゆめみている。

また清川君は、今いちょう一本しかないこの広場のまわりに、いろいろな木を植え、花だんを作って花をさかせ、木かげにはベンチをしつらえて、町の人にも来て休んでもらうと言い、ぼくは、一メートルぐらい土をもりあげてぶたいを作り、野外げきなどしたらどうだろうと話を出してみた。すると、橋本君が、毎年せまい所でする月見おどりを、ことしはこの広場でやってもらったらいいねと、話をすすめる。

また五年生の石田さんは、大きなけいじ板をかんばん屋さんに寄付してもらって、それにわたしたちのかべ新聞をはることにしたらと言う。

「わたしたちが集まって、こんな相談をするおうちもほしいね」。

「そうだ、さっき出た図書館だの、天文台だのをいっしょにした少し大きなおうちを建ててもらえばいいな」。

そのほか、いろいろな展らん会をしたり、動物をかったりするなどと、ゆめははてしなくひろがった。

また、この時この広場につける名まえのことが話に出た。いろいろ考えた後、ぼくらの住む町の名をとって、「あけぼの広場」ということに決めた。

二、三日のうちに、また立花さんに相談して、このすばらしいゆめを話し、どんなお手つだいでもするから、どれからでも実現するようにほねおってほしいとお願いすることにした。

立花さんだけでなく、町の人にもぼくらの作った新聞や、かべ新聞でこのことをお願いしたら、このゆめはあん外早く実現するかもしれないなどと、つぎからつぎへいろんな計画が、とび出して来る。

ぼくは一つの仕事がつぎつぎとこんな楽しいゆめをえがかせてくれることを、まったくふしぎに思った。

(四) かべ新聞

けいじ板

このゆめを聞いた立花さんは、ちょっとおどろかれたようだったが、ぼくらがあまり熱心だったので、こうおっしゃった。

「もし、そんなことができたら、それこそ日本一の子ども広場になりますね。一つぐらいはそんな広場があってもいい。やりましょう。できるだけほねおってみますから、みなさんも焼けあとをかたづけたしんけんさをなくさないようにしてがんばってください」。

ぼくらは大喜びで立花さんのおうちを出た。

ゆめはもう半分ぐらい実現したような気がする。

ぼくらはその足で、かんばん屋の木村さんのところへおしかけた。

そして、山田君からぼくらの希望を細かく話した。木村さんは仕事をやめて、「ほう、ほう」と感心しながら話を聞いてくださった。ふたりの店員さんも、聞きいっている。木村さんは、とても子どもずきで、よく野球のおうえんに来たり、店にあるラジオを外に向けて、

道を通る人に野球の放送を聞かしてやったりする人だ。

「よろしい。わたしがきみたちのゆめの実現の第一歩を引受けましょう。どんな大きさ、どんな形にしたらよいか、設計図を書いておいで。」

ぼくらは思わずばんざいと言ってしまった。

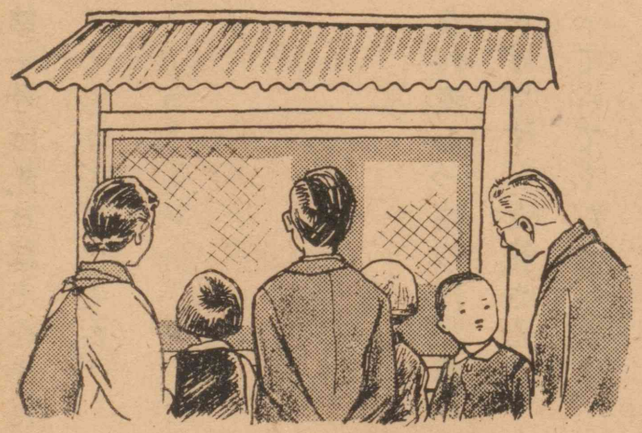
四、五日の後、木村さんが立ててくださったけいじ板は、ぼくらの設計よりもずっとすばらしいものだった。

広い屋根がつき、新聞をはる所は、新聞紙の一倍半ぐらいの広さで、そこを緑のペンキでぬり、ほかは全部まっ白にぬってしあげ、とても上品にできている。雨にぬれないように広いガラスを入れ、そのガラスがこわれないように金あみがはってある。店員さんふた

りがリヤカーで運んで来て、石だんを登ったところにしっかり立ててくださった。

なんにもなかった広場は急ににぎやかになった。

けいじ板ができたので、さっそくかべ新聞を作ることになった。今までぼくたちの作ったのはクラスかべ新聞だったが、こんどは町の人にも読んでもらうので、新しいくふうがいる。新聞の名は「あけぼの」、受持ちは五年の女子と四年生ということになったので、ぼくらはその編集



にとりかかった。いろいろ相談の結果、第一号は先日話し合った「広場のゆめ」を中心にして、記事を作ってもらうことにした。

あけぼの　第一号

立花さんへの感謝

あの焼けあとがこのように町の広場に生まれ変わったのは、第一に民生委員の立花さんのおかげです。立花さんは、実によくぼくたちの心を知っていてくださいます。いつもこの町の子どものしあわせを考えていてくださいます。立花さんは、ぼくたちがどんなとっぴな

相談をもちかけても、よく考えてくださいます。ぼくらは、立花さんや町の人のお力をかりて、この広場を、日本一の子ども広場にしたいと思います。

みなさん、このかべ新聞を読んでください。そしてぼくらのゆめを知ってください。あけぼの町はこの広場からもっともっと明かるくなっていくと思います。

この広場は

この広場はわたしたち子どもだけのものではありません。おとなも子どももこの広場を自由にお使いください。小さい人はすな場で遊ばせてください。いまにブランコやすべり台もできますからそこ

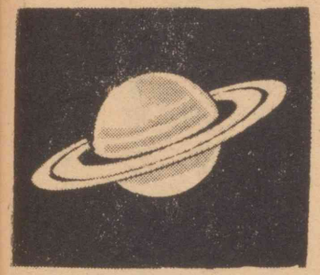
で遊んでください。

おばあさんは木かげで赤ちゃんを遊ばせてください。

月のよいばんは、町の人がここでおどり明かしてもけっこうです。

わたしたちもそのなかまに入れてもらいましょう。——考えただけでもすばらしいではありませんか。

広場はいつもきれいにしておきましょう。みんなでこの広場をかわいがってください。



星の世界

物ほしざおで、星をたたき落とすわらい話がありますね。なるほど星を落とすことはできませんが、

星の世界を見ることはだれにでもできます。いちどでも望遠鏡で星の世界をのぞいた人は、きっと大きなおどろきを持つにちがいありません。そして、もっと早くから星の観測をやればよかったと思うことでしょう。一日のお仕事につかれた町の人が、ここにすえつけた望遠鏡をのぞいて、心配なことや、世の中のうるさいことを、しばらくでもおわすれになることができたら、どんなにすばらしいでしょう。これからは、月や星を見るのには、とてもいい季節になります。町のおとなや子どもが、だんだん星に親しみを持つようになり、やがてこの町からも、しずおかの清水さんや、くらしきの本田先生のような人が出るようになったらどうでしょう。天文台に望遠鏡、町の力で、ぜひ早く作りたいものですね。近いうちに、立花さ

んのおうちで、「星を見る会」を開きますから、どうぞみなさんおいでください。

あけぼの図書館

わたしたちは、読みたい本も思うように買えないことがあるし、本屋で立ち読みするのは、あまり感心できません。こんな時、ためになる本や、すきな本が、たくさんそろっている図書館ができていたら、どんなにいいでしょう。いたずらをしたり、買い食いしたり、勉強のきらいだったりする子どもが、ひとりもいなくなって、この図書館がはんじょうするような町にしたいものですね。それは、ゆめでしょうか。ぎっしりと本のならんだ本だな、明かるい静かなへ

やで読書を楽しむ。考えただけでも、わたしたちの心はあたたかくなってきます。

庭木がほしい

ごらんのように、この広場には、焼け残りのいちょうが、たった一本しかありません。どんな木でもけっこうです。余分な庭木があったら、寄付をしてください。移植は、植正のおじさんがしてくれることになっています。たくさんの木を植えて、木かげを作りたい。すず風もさそって来たい。小鳥にも遊びに来てもらいたいと思います。花だんも作ります。そうなったら、この広場は、見ちがえるように、いごこちのよい小さな公園になるでしょう。

◇星を見る会

このかべ新聞に中西君が書いていますように，秋山先生をおまねきして，星を見る会を開きます。おとなの方も，どうぞおいでください。きっとおもしろいと思います。

10月23日夜　午後7時—9時

◇野球試合

本町子ども会との第5回戦をやります。今のところ，1勝3敗の成績です。じゅうぶん練習して勝ちたいと思います。どうぞおうえんに来てください。

◇これから広場でやりたいこと

○お月見野外げきとお月見おどり

○町ののどじまん会

◇学校の行事

○父兄会——10月10日

なるべくたくさんの方がおいでくださって，学校をよくするよいお話し合いをしてください。

○運動会——10月17日

わたしたちの楽しい秋の運動会です。おとうさんや，おかあさん，小さい方にもやっていただく種目もたくさん考えてあります。どうぞみなさんおいでください。そして，この一日をお楽しみください。

○遠足——10月30日

かべ新聞には、このほかに山本君のまん画とか、町をきれいにしようという標語、わらい話なども入れて、おもしろくできあがった。ぼくらは、これをけいじ板にはりつけた。友だちや町の人が、どのように読んでくれるか、楽しみでたまらなかった。第一号ができたので、さっそく、第二号の編集会を、春美さんのうちで開くことにした。

(五) お月見おどり会

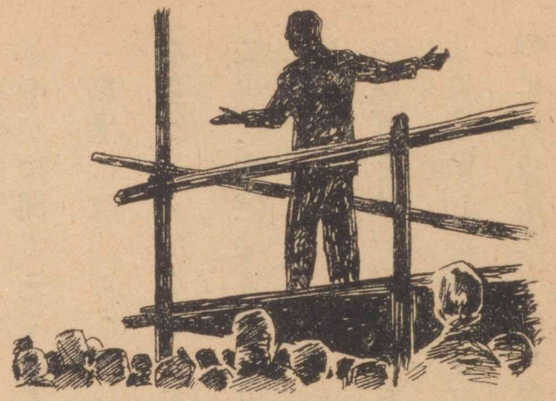
心配した雨も晴れて、お天気は上々、日がはいると、もう、やぐらのたいこが町中に鳴りひびいて、うきうきした人の心を広場へさ

そう。どのうちでも少し早目に夕はんをすますと、もうそのころには、まんまるいお月様が、静かに明かるく、町の空にのぼって来た。

広場からは、たいこの音にまじって、ガヤガヤと大勢の声が、にぎやかに聞こえてくる。ぼくは、妹をつれて、広場へ走った。

広場には、もうずいぶんたくさんの人が集まっている。わかい人たちは、ふだんとはすっかりちがった着物を着て、赤い帯をたらしたり、ねえさんかぶりや、おけしょうをしたりしている。

そのうちに、いろいろな面をつけた人だの、旧式の洋服を着て長いひげをはやした人だの、すもうとりだの、おもいおもいに仮そうした人が、つぎつぎに集まって来る。子どもたちは、「あれはとこ屋のにいさんだ。」「あれは時計屋のおじさんだ。」などと、大さわぎだ。



もうすっかり、広場いっぱいのわらい声になってしまった。

ド、ド、ド、ド、ドンとたいこが鳴ると、広場は急に静かになり、やがてみんなのはく手にむかえられて、立花さんが、広場のまん中に作った、やぐらの上に立たれた。

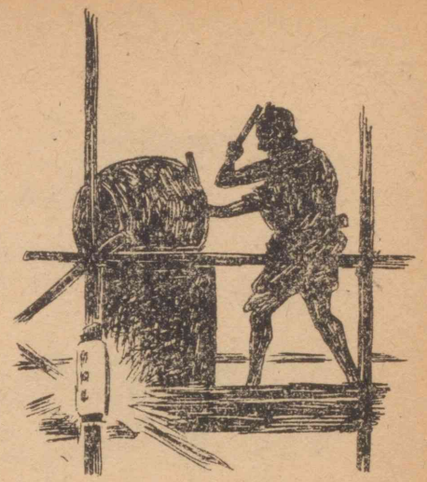
「みなさん、今夜はほんとうによいお月夜です。どうぞぞんぶんにおどってください。わたしたちは、ずいぶんひさしい間、おどりや歌を心から楽しむことをわすれていました。ごぞんじのように、この広場は、子どもたちの力でできました。このおどりの会は、わかい人の力で成

り立ちました。ほんとにたのもしいことです。わたしたちの町は、こんなにすばらしいわかい力を持っているのです。町は一年一年明かるく、住みよくなってきました。さあ、お月様ものぼりました。思うぞんぶんおどってください。」

われるようなはく手をあびて、立花さんは、やぐらをおりた。入れかわりに、たいこうちの名人といわれている、さかな屋の金じいさんが、向こうはちまきに赤だすき、はっぴすがたでやぐらに登った。またわれるようなはく手。

「みなさん、しっかり、たのみまっせ。」

「じいさん、ひさしぶりだね。すばらしいばちさばきを聞かしてくださいよ。」



みんながそうさけぶと、

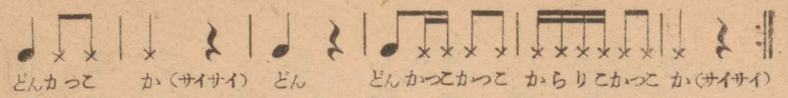
「あいよ」。

金じいさんは、二本のばちをにぎり、しっかりしたしせいでたいこに向かった。

ドン　ドン　ドン、ドン　カッコ　カ

はらにひびく、すばらしい力強い音、のどじまんの歌い手も、たいこをとりまいて用意はできた。やぐらをかこんで、いくえにもおどりの輪ができた。

歌が始まる。たいこがひびく、手びょうしがそろう。それからは、もうおとなも子どもも、わかい人も、年よりも、すっかりいい気持に



なって、おどりの波に乗ってしまう。

「そろたそろたよ、みんながそろた。おどりすきなら出てみてごらん。まるい　十五夜の　お月様」。

はずかしくて、おどりの中にはいれなかった見物人も、ついつりこまれておどりだす。ほがらかなわらい声がはじける。いつどびこんだのか、着物のすそをはしょり、ほおかむりをしたおとうさんが、ぼくの

前をおどってまわる。おかあさんがわらっていらっしゃるが、なかなかうまい。よく見ると、輪の中にとなり町の人も、十数人まじっている。

やぐらの上の金じいさんは、たいこのまわりをおどりながら、すばらしいリズムを打ち出している。まったくすばらしい。

歌はますますにぎやかに、おどりの人は、いよいよふえてくる。月はもう、ま上にかかっている。

ぼくは、もっと見ていたかったのだが、おそくなるので、家に帰ってねた。たいこの音と、大勢の歌声が、手にとるように、ぼくのまくらもとに聞こえてくる。

(六) 広場はこれから

広場は、もうぼくらだけのものではなくなってきた。

ぼくらが学校に出かけたるすは、小さい子どもや、赤ちゃんの安全な遊び場所になり、おとなの寄り合いや、楽しみの場所としても利用されるようになった。

ぼくらは、この広場を作ったことで、いろいろの勉強をした。

ぼくらは、ぼくらの力の大きいことを知った。人のために働くことや、しんけんにする仕事は、どんなにゆかいなことかということもわかった。

しかし、ぼくらのえがいたゆめは、まだまだ、ほんのわずかしか実現されていない。ぼくらの努力は、まだまだ続けられなければならない。

ぼくらのゆめが、この広場につぎつぎと実現していくことを思うと、ぼくらのむねはひとりでにおどってくる。どんなに苦しいことでも、それをおしきって、日本一の子どもの広場にしようとする力と希望がわいてくる。

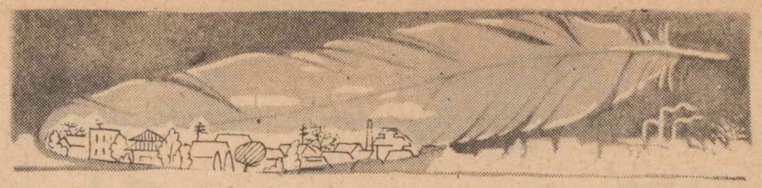
広場、広場、あけぼの広場。

ぼくらの広場を、ぼくらの力でそだてよう。

深まってゆく秋

秋が深くなってきました。十月一日から、全国いっせいに赤いはねの共同ぼ金が始まります。しっとりと心のおちつくこの秋は、勉強にも、運動にもよい季節ですね。みなさんは、きっと、読書がすきでしょう。みなさんの教室にも、おいおい、学級文庫ができているだろうと思います。みなさんは、自分の読書について考えたことがありますか。みなさんの学級文庫には、今、どんな問題がありますか。ここには、夏休みにいなかの信二君の所へ行って、読書ずきになった大川明君、二学期になって、新しい図書委員がえらばれた、明君のクラスのようす、いま一つは、明君が信二君にならって作ろうとしている、ノートのことなどが書かれています。上巻の「春休み東京旅行記」といっしょに読んでください。

秋晴れの日曜日など、なかよしどうしでハイキングに行くことも、秋の楽しみの一つですね。高木きぬ子さんのハイキングの作文も、みなさんの参考になると思います。



(一)　赤いはね

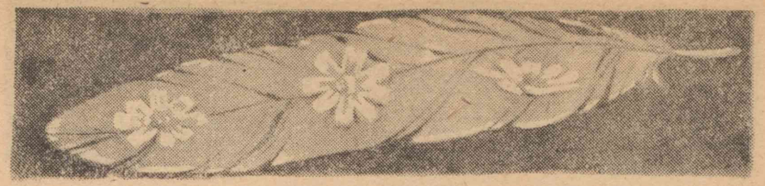
秋の明かるい日ざしが　町のすみずみにまでさしている。家家のかきねには、コスモスの花が　風にゆれている。

十月、静かな町のあちこちに　ことしも　共同ぼ金をつのる人々の　やさしい声が　ひびいてくる。

赤いはねをむねにつけて、こちらに歩いてくる人、向こうへいく人、子供の手をひいたおかあさんと、手をひかれた子供、あるいは自転車に乗ったゆうびん屋さん、だれのむねにも、赤いはねが風にそよいでいる。

駅前の広場では、いまぼ金ばこに　お金を入れて　はねをむねにつけてもらっている人、やさしくお礼を言いながら　赤いはねをさしてやっている人たちのすがたが見える。ああ、明かるくすんだ　秋の光の中で　これはなんというやさしい風景であろう。

わたしは思わず　うっとりとみとれてたちどまる。そしてこのぼ金ですくわれるたくさんのふしあわせな人たちのことを心にえがく。あの目の見えない子供たち、おとうさんも、おかあさんもなくした子供たち、それから　みよりもない　さびしい老人たちのことなどを。



このかわいそうな人たちは、どんなに　喜んで　この町の人人の　あたたかい心を受取ることだろう。

わたしは、そっと自分のむねのやわらかいはねをおさえてみる。それから　静かに歩きだす。なぜか　やさしい気持でいっぱいになりながら。

赤いはね　あたたかい心のしるしの赤いはね。赤いはねは道ゆく人々のだれのむねにも　明かるく、そよいでいる。

コスモスの花も　ゆれている。

（二）　ぼくの読書

いなかのおじさん

春休みに上京して来た信二君とのやくそくどおり、ぼくはねえさんとふたりで、八月の十五日に東京をたって、二週間ほど、いなかの生活をしてきた。両親に別れてこんなに長くよそにくらしたことは、ぼくたちふたりには初めてだったので、つい心細くなったり、さびしくなったりしたこともあったが、信二君や、おじさん、おばさん、それに、信二君の友だちなどが、とてもしんせつにしてくださったので、楽しい日々を送ることができた。

あいにく雨の日が多くて、山登りや、ぼんおどりの見物など、信二君が予定してくれていたことができず、みんな残念がったり、きのどくがったりしたが、ぼくは、そのために、かえっていい勉強ができた。

ぼくは、もともと、本を読むことがすきでない。学校でおそわる本を読むくらいのことなら、あまり苦労はしないが、友だちの林君や中島君のように、ぶあつい本を、つぎからつぎへと読んでいくなどということは、とてもできない。だから、学級文庫のできた時だって、みんなが喜ぶほど、うれしくはなかった。それよりも、フットボールか、野球の道具でもそろえてもらった方が、ずっと喜んだ

にちがいない。このように、本を読む楽しみは、ぼくにはかなりえんの遠いことだった。

ところが、この夏休みの二週間は、ぼくを、だんだん、本ずきにしてくれた。それは、まず信二君のおかげであり、それ以上におじさんのおかげであったといっていい。

おじさんは、農学校の出身だが、学校を出ると、すぐにおうちの仕事を受けついで、もう二十年あまり、今の仕事を続けている。

学者とか、先生をするには、本の必要なことはわかるが、おじさんのように、いなかで農業をするのに、どうしてこんなに本がいるのか、ぼくにはわからなかった。

おじさんのへやには、広くて高い本だなに、ずいぶんたくさんの

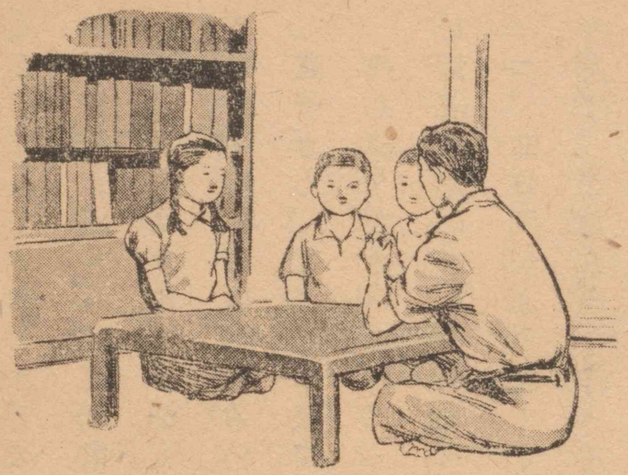
本がならべてある。信二君の話によると、ここにおききれないものは、土ぞうの中にしまってあるそうだが、まったく、ひとりで持っているにはもったいないくらいの本持ちだ。

ぼくとちがって、読書家のねえさんは、この本だなを見て、

「まあ、ずいぶんたくさんの本ですね。おじさんがこんな読書家だとは知りませんでした。きょうだいでも、うちのおとうさんとは、まるっきりちがいますね」。

と、すっかり感心していた。

「わたしは、わかい時から本がすきだったので、ほかのことはけんやくしてでも、本を買っているうちに、ついいつの間にか、少しずつたまったのだがね」。



「農業の本だけでなく、ずいぶんいろいろの本がありますね」。

「いや、たいしたことはない。でも、小鳥とか、こん虫などのことは、学生のころからすきで少し調べてきたから、そんなことに関した本なら、いくらか集まっている」。

「小説や歌の本、絵の本など、わたしの読みたい本がたくさんあります。読ませてくださいね」。

「さあさあどうぞ、どれでも引き出して読みなさい。さがせば明君にもわかる本があるかもしれないよ」。

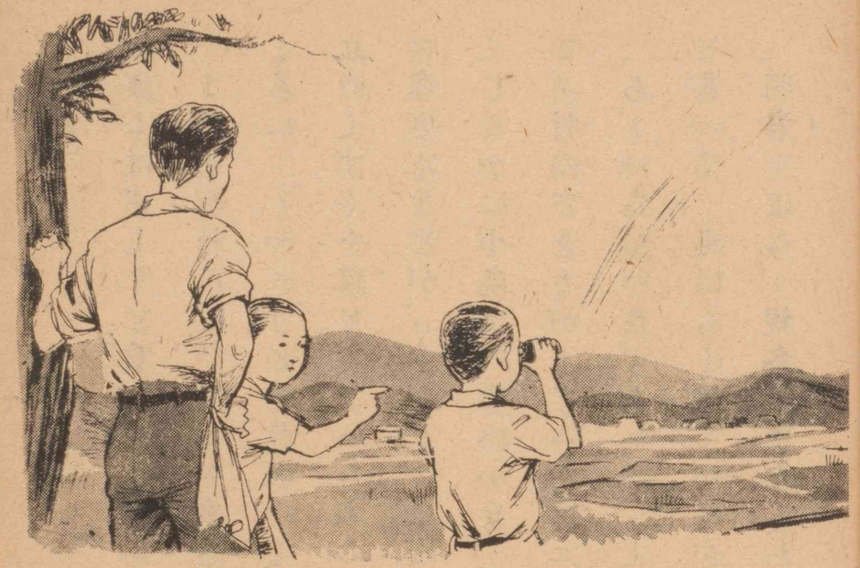
「ぼくはあまり本ずきではないのです」。
「そうそう、きみは運動家だったね」。
ぼくはちょっとはずかしかったが、ねえさんと同じように、おじさんの本だなにはおどろいていた。
「道子さん、ここまで来て、そんなに本ばかり読まなくても、少しのんびりなさいよ」。
とおばさんにからかわれるほど、ねえさんはここでも熱心に読んだ。
二、三日雨がふり続くと、ぼくはすっかりたいくつした。おうちの人は、ごちそうを作ったり、信二君はなかよしの友だちをつれて来たりして、ぼくの気をまぎらせるようにしてくれた。
そんな時、信二君は、おじさんの本だなの中から、小鳥の本や、

こん虫の本をもち出して来て、ぼくに見せてくれた。そんな本はぼくには、初めての本だったし、あまりおもしろくもなかったが、信二君がよく知っていて、いろいろ説明をしてくれたり、おじさんの集めている、ちょうや、美しい小鳥のたまごの標本などとあわせて見ているうちに、だんだんおもしろくなってきた。
おじさんが、本だけでなく、こんな標本も、ずいぶんたくさん集めていることを知って、ぼくはまたおどろいた。
信二君とふたりでそれを見ていると、おじさんも来られて、いろいろおもしろいお話をしてくださった。
ぼくは、信二君が、とてもよく、鳥や虫のことを知っているのに感心した。おじさんのお話によると、こん虫の標本なども、だいぶ

うまく作れるということだし、信二君も、おじさんのあとをついで、この方の勉強をしたいと言っているそうだ。

雨あがり

ある日、おじさんと信二君とぼくの三人で、たんぼを見まわりに行ったことがある。夕立の通ったあとだったので、草木の緑が美しく、遠い空には、あざやかなにじがかかっていた。その時信二君は、いつも柱時計の下にかけてある、大きなそうがん鏡を、かたにかけて来た。これは、おじさんや信二君が、小鳥の観察に使うのだそうで、なかなかりっぱなそうがん鏡らしい。



「小鳥の観察は、春と秋とがいちばんいい。今はどの小鳥もひなをそだてるのにいそがしいので、よい鳴き声も聞かしてくれない。でも、ひなやひなのそだて方をみるのには、いい時だがね」。

こんなことをおっしゃって、信二君から受け取ったそうがん鏡を、ぼくにかしてくださった。

「さあ、なんでも見てごらん。おもしろいものがみつかるかもしれな

いよ」。

ぼくはずしりと重いそうがん鏡を目にあてた。

まずめがねにとびこんで来たのは、にじだ。手のとどきそうなところに、くっきりと七色のにじがかかっている。それから、まだタ立のしずくを落としている木の葉や、村のはずれを走るバスの中のお客さんなどが、すぐそこにはっきりと見えた。

「どこかに小鳥はいないかな」。

と、村の方をさがしていた信二君が、

「あ、いた、いた。あれは、しじゅうがらかな」。

と言って、しばらく見ていたが、

「明君、ほら、親鳥が虫をくわえて来た。近くにすがあるらしいよ。

もう少し近くへ行ってみよう」。

と言って、林の方へぼくをさそって行った。

そうがん鏡で見ると、しじゅうがらの小さい動作が、鳥かごの中の鳥を見るようによくわかる。鳥のすは、木のあなの中らしくて、よくわからないが、親鳥のようすを細かに見ていると、ひなの鳴き声が聞こえてくるようだ。その時、信二君がとつぜん、

「あ、あれはもずらしいぞ」。

と言って、ずっと向こうの、かきの木のこずえをみつめていたが、すぐにそうがん鏡で観察を始めた。

「たしかにもずだね。鳴き声を聞かないでみつけたのはえらいぞ」。

「明君、見てごらん。あのもずも、ばったをくわえているよ」。

なるほど、もずは、大きなばったをしっかりとくわえて、するどい目であたりを見まわし、ひっきりなしにしっぽを動かしている。

「もうもずが来たかな。ことしは、いつもより十四、五日早く来たようだ」。

おじさんはひとりごとのようにおっしゃって、歩きだされた。

よくみのった、たんぼのいねのほが、風にそよいでいる。ぼくはいなさくのことはよく知らないが、信二君のうちのたんぼは、あたりのいねとは、一目でわかるほどよくできている。ぼくは、ここでもおじさんの本だなのことを思いだした。

帰り道に、おじさんが一本の草をつんで、

「明君、この草の名を知ってるかね」。

とおたずねになった。ぼくは、しばらく考えていたが、ふと思いついた。

「これ、きんぽうげじゃないかしら」。

すると、おじさんは、にこにこしておっしゃった。

「そうだ、よく知ってたね」。

「春の遠足の時、先生から毒草だとおそわったのを、おぼえていたのです。でもほかの草は、何にも知りませんから、もうきかないでください」。

と言うと、おじさんは、大きな声でわらわれた。道々ぼくが取って

たずねる草の名は、ほとんど全部知っていらっしゃった。
家に帰って、また、いろいろの本を見た。信二君は、日記にこの日もずの来たことを書きながら、山に登れたら、いろいろめずらしい小鳥が観察できたのにと、ぼくらのためにまたひどく残念がった。

おみやげ

それから二日ほどは、信二君の持っている子供むきの本を読んだ。
ぼくは、まだ読んでいなかった『子じか物語』を読み始めた。春休みに三人で見たあのえい画のことを思いだしながら読んだが、えい画とはずいぶんちがったことが書いてあるので、ねえさんにたずねると、「『子じか物語』は、物語をえい画にしたのだが、えい画を

作る人が、物語の中からえい画になりそうなところをぬきとって、シナリオを作る。そのシナリオによって、部分、部分を写真にとり、それをつなぎ合わせ、音楽などをうまくそえて、えい画にしあげていく」。ということを、教えてくださった。
それから、虫の標本の作り方とか、わたり鳥の本なども読んだ。信二君がまた標本を出して来て、よく説明してくれたので、今まで見向きもしたことのなかったこんな本のおもしろさが、だんだんわかってきた。
ぼくはこうして、短いいなかの生活の中に、今まで知らなかった読書のおもしろさをみつけだした。
おじさんは、

「いなかのことで、何のおみやげもないから、これをあげよう」。
と、おっしゃって、美しいちょうの標本と、きれいな大ばんの鳥の本をくださった。
本といえば、教室で読む本か、まん画ぐらいしか読まなかったぼくが、二学期になると、学級文庫の本も、もう何さつか読んでいる。
二、三日前、おかあさんが、
「いなかからのおみやげで、いちばんうれしかったのは、明さんが本ずきになったことですね」。
と、喜んでくださったが、それはぼくにとってもほんとにうれしいことである。

(三) 学級文庫

二学期の初めの自治会でクラス委員の改選があった。ぼくは一学期にひき続いて、運動委員をつとめることになったが、図書委員は全部新しくかわって、林君、中島君、青山さん、秋山さんの四人が世話をしてくれることになった。
たしか第二回の自治会の時、委員の中島君から、こんな話が出た。
「ぼくたち四人がこんど委員に選ばれましたので、この学級文庫をもっとよくするためにいろいろ相談しました。
その一つとして委員の人が前から力を入れてきてくださった、

本をたいせつにすること、
かしかりをたしかにすること、
本だなをよくせいとんすること、
などのこともよくやっていきたいと思います。それから、ぼくたち新委員の考えたことは、
もっと読書のすきな人をふやすこと、
みんなの読みたい本、もっとためになる本を買うこと、
の二つです。文庫の本をかりる人はもうたいがいきまっています。これでは、せっかく学級文庫があってもクラスのためになることは少ないと思います。秋は読書の季節といいますから、みんなでおおいに、この文庫を利用してください。また、本だなを見ると、一回読めば、二度と見る気のしないようなつまらない本も、だいぶんありますから、こんどからは、みなさんの読みたい本で、五年、六年になっても使えるような本を集めたいと思います。そのうちに、紙を配りますから、お答を書いてください。お願いします。」

ぼくは、新しい委員の熱心なのがうれしかった。

二、三日して、委員から配られた紙に

一、あなたが今読みたいと思っている本の名を二さつぐら

い書いてください。

二、あなたは、まん画を読みたいですか。それともまん画はつまらないですか、すきなわけ、きらいなわけも書いてください。

三、あなたは、どんなきっかけから読書ずきになりましたか。

四、あなたは、なぜ本を読むのがきらいですか。

○十月五日までに委員に出してください。

という四つの問題がとうしゃばんでいんさつしてあった。ぼくは家に帰ってねえさんにこの紙をみせた。ねえさんは、

「なかなかしっかりした図書委員ですね。きっといい学級文庫になるでしょう。この調べの結果が発表されたら、わたしにも知らせてくださいね」

とおっしゃった。

ぼくは、その紙に自分の考えていることをていねいに書いた。

一、子供むきに書いたアメリカの野球の本と　小学生用のこん虫ずかんを買ってください。

二、ぼくは、もう、まん画はつまらなくなりました。

○どのまん画も、すじがだいたいきまっている。

○ありもしない、できもしない、ばかげたことをほん

とらしく書いている。
○絵が下品だったり、ひどいことばを使っているものが多い。

三、夏休みにいなかに行った時、いとこやおじさんに、いい本を見せてもらったことからすきになりました。
この秋は、文庫と姉の本をうんと読みたいと思います。

ぼくはよく日、これを委員の青山さんにわたした。青山さんはていねいにお礼を言ってくれた。

書だなのそばには、

「秋が深まる、本を読もう」。

と書いた文字の下に、明かるい電燈のそばで本を読んでいる絵をかいたポスターがはられていた。本だなはきちんと整理され、本につけた番号もすっかり書きかえられている。「かし出しちょう」も新しくできて、たなのそばにかけてあった。

それから二、三日たったある日、先生が、

「しばらくの間、毎日、昼休みのあとで、この本を読んであげよう」。

とおっしゃって、二百ページほどの本を読み始めてくださった。それは、「合唱部隊」という音楽ずきの子供たちのことを書いた本だった。そのうちに、みんなは毎日この時間を楽しみに待つようになった。

第三回の自治会に、林君が先日の読書調べの結果を報告した。み

んながまじめにあの紙に書いてくれたお礼を言った後、
「文庫に買入れたい本は、ずいぶんいろいろありました。中には、五、六人同じ本の名を書いてくださった人もあります。委員は先生にもご相談して、この中から、つぎに買う本を念入りに選びたいと思います。それから、まん画のすきな人は、クラスの三分の二ぐらい、つまらなくなったという人が三分の一ぐらいということもわかりました。大川君のがよくまとまっていましたから、ここでちょっと読ましてもらいます。」
と言って、ぼくの出した紙を読んだ。
「本を読むのがすきでない人も、かくさずに、よく書いてください。ぼくたちは、そのわけを聞かしてもらったので、この人

たちも、早く読書のおもしろさをつかまえるようにしてあげたいと思っています。」
と言ったので、みんなははく手した。すると秋山さんが立って、
「十一月の初めには、読書週間が来ます。この週間中に、読書発表会をしたいと思いますから、今から用意しておいてください。」
と言った。ぼくは、本を読むことがすきになったわけをくわしくみんなに話そうと考えた。
そのうちに、新しい本が二さつ三さつと本だなにはいった。ぼくの希望した、アメリカの野球の本も買入れられた。番号と買入れた月日がきちんと書いてある。ぼくはこれをいちばん先にかりて読んだ。ふたりの男の子が、となりにひっこして来たすばらしい

野球選手となかよしになって、コーチをしてもらったり、試合を見につれて行ってもらったりすることが、とてもおもしろく書いてあった。ぼくは、それを一気に読んでしまった。そして、これを、野球ずきで読書ぎらいな、原田君にすすめた。原田君は、ぱらぱらとめくっていたが、そのうちに中の絵がおもしろいのにつりこまれたらしく、初めからぼつぼつ読みだした。

ところが、それがよほどおもしろくなったとみえて、放課後も教室に居残ってバットをふるまねをしたり、グローブを使うかっこうをしたりして、熱心に読んでいた。ぼくはもしこの本をきっかけに、書物ぎら

いの原田君が読書ずきになってくれたらと思いながら、学校から帰った。

家に帰って、ねえさんに原田君のことを話した。ねえさんは、ぼくが原田君に、読書をすすめたことをほめてくださった。考えてみると、ぼくの読書もこのねえさんにおかげを受けていることが多い。

(四) ぼくのノート

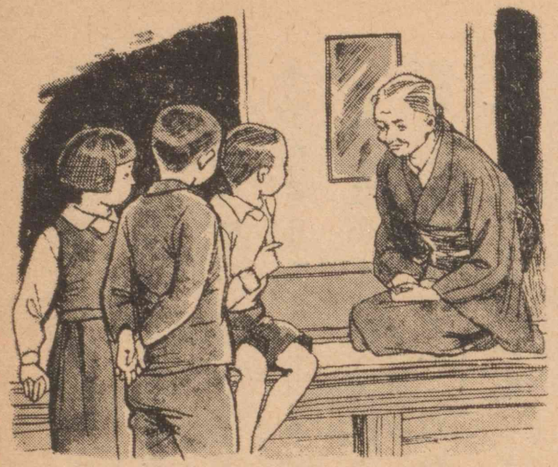
春休みに上京して来た信二君の勉強ぶりには、ぼくだけでなく、おかあさんも、ねえさんも、すっかり感心したものでした。

信二君は、どんなにつかれていても、その日したこと、見たこと、あったことを、こまごまとノートに書いていました。いなかのおか

あさんへは、毎日のように手紙を書き、見物に出かけない日には、よくつくえについて、ノートの整理をしていました。信二君のノートには、東京見物のことが、だんだんとふえて、大ばんのノートがたちまちふくらんでいきました。

ぼくは、夏休み、いなかへ出かけた時、信二君のノートをゆっくり見せてもらいました。そして、その勉強ぶりや、おもしろいくふうに、また、新しく感心させられました。

信二君は、東京からかえると二週間ぐらいかかって、旅行記の一部分を書きなおしたり、書きたらないところへ書きたしをしたり、おかあさんに出した手紙をみんなはりつけたりして、それをノート二さつにすっかり整理をしたのだそうです。



そして、この整理したノートをもとにして、クラスで二回ほど、東京のおみやげ話をし、また近所の人にも、たびたび話してあげたということです。旅行記は、その日その日に書いたものであり、それをよく整理してあるので、話すことはたしかだし、それに、話題はいくらでも、この中にあるわけです。おとなりのおばあさんは、

「信ちゃんの、東京のおみやげ話は、とてもおもしろい。もうこの年になっては東京へも行けないが、信ちゃんのくわしい話が聞けるので、わたしゃもう満足ですよ」。

とおっしゃっているそうです。信二君はこのおばあさんのために、もう三回ほど東京の話をしてあげたそうですが、「子じか物語」の話など聞く時には、「ほんとにねえ」。と言ってなみだをためていらっしゃったそうです。

ぼくは今まで、ノートをたいせつにしたり、かわいがったりしたことはありません。だから、時には、表紙がとれていたり、とじ糸が切れたりしていたこともあります。使ってしまったら、どこかに投げこんだり、ほかの古本などといっしょにくずやに売ったりしたものです。それというのも、ぼくのノートには、あとまでとっておくほどだいじなことや、心のこもったことが書いてないからです。たまには、そんなことが書いてあっても、そのつぎのページに漢字

の練習がしてあったり、らく書きがあったりするので、とっておくなどという気にはならないのです。

ところが信二君は、二年生のころからのノートを、きちんとそろえてとっています。どのノートも形のそろった大がたのもので、表紙のいたんだものは、しゅうぜんして、ちゃんと番号をつけてあります。

ノートには、その時、その時の勉強のようすが、いろいろなすがたで残されています。作文が書いてあったり、あさがおの観察を続けた絵があったり、記念切手や新聞写真の切りぬきがはってあったり、よそに勉強に出かけて聞いて来た話を整理したり、その土地の方言や、遠足に行った時に使ったかんたんな地図や、ひろって来た

落ち葉がはりつけてあったりして、ほかの人が見てもおもしろいノートです。だから、信二君にしてみれば、くずやに売る気などにはとてもならないでしょう。もう、十さつあまりできていますが、中でも、こんどの東京旅行記は、まったくすばらしいものです。作文、手紙、電報、詩、切手、いろいろな入場券、えい画のすじがき、写真など、書いたもの、はったもの、みんな細かいところに気を配り、字や絵なども、とくべつていねいに書いてあります。

信二君は、

「これは、ぼくの大きくなっていく足あとです。ぼくは、これからもずっとこういうノートを作り、だいじにとっておくつもりですよ。」

と言っていましたが、このことばはぼくのむねをうちました。ほんとにそのとおりで、この道は、もう二度と歩きなおすことのできない道です。小学校時代にこんなノートが三十さつ四十さつとできたら、どんなにうれしいことでしょう。たとえ、そこに、大きくなって見てつまらないことが書いてあっても、いまに、どんなものともとりかえることのできないたからものになるでしょう。

信二君がこのようにノートをたいせつにすることは、おじさんからおそわったのだそうですが、使い方のくふうは、自分でしたのだそうです。信二君はこれからも、いろいろなくふうをこのノートにもりこんでいくでしょう。こんどの旅行記だって三年生の時のとはずいぶんちがっていますから。

いなかに行ってよい勉強をした中で、信二君のノートを見せてもらったことも、ぼくにはたいそうありがたいことでした。今からでもおそくはないと思って、ぼくもさっそくこの二学期から、このようなノートを書き始めました。

本を読んだ後の感想や、すじがき、ぬきがき、野球選手の名まえ、いろいろなスポーツのレコード、クラスの毎週の計画、自治会できまったこと、毎月計る体重、ゆうびん料金など、これはと思ったことは何でも書いておきます。まだ第一さつ目ですが、もうこのノートがとてもかわいくなってきました。そこで、ぼくは、ノートの表紙に「ぼくのかわいいフート」という名まえを書きました。おかあさんにこのノートのことをお話すると、とてもおよろこびになって、

「それはいいことね。わたしも、その『かわいいノート』の成長をみまもってあげますよ」。

とおっしゃってくださいました。

作文がきらいで、ふでぶしょうなぼくも、このノートをかわいがるうちに、だんだん書くことが楽しくなってきそうです。また、このノートは、ぼくが作文や詩やげきを書こうと思う時に、いろいろな材料を出してくれるようにもなりそうです。

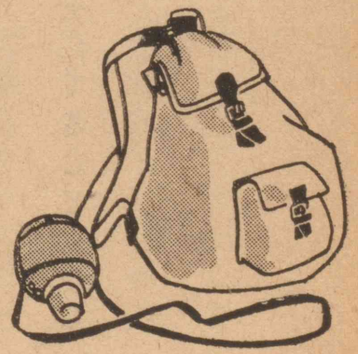
このノートをそだてることは、ぼくがぼくをそだてることになるのだということも、わかってきました。

（五）　ハイキング

石川さん

二学期の始めに、となりの岩本さんのところへ、石川さんという学生さんがひっこして来ました。なんでも、岩本さんのしんせきの方で、いま、大学の二年生だということです。

石川さんは、まじめな、明かるい、スポーツずきの青年です。ここにひっこされて、二、三日たつと、わたしたちは、すぐになかよしになりました。勉強のひまなときには、よくわたしたちと遊んでくれますし、日曜日などには、男の子たちとキャッチボールをしたり、野球の試合につれて行ってくれたりします。また、夕方など、岩本さんのところの赤ちゃんをだっこして、近くの本屋さんをのぞいているすがたもよく見かけます。



大学では、動物の研究をしているそうで、動物のことなら何でもよく知っています。わたしたちは、時々、二、三人の友だちと石川さんのおへやにおじゃますることがあります。おへやは二階の南向きで、まどぎわにつくえがおいてあり、かべには、きれいなちょうの標本がかかっています。きちんとせいとんされた本だなの上には、小鳥のはくせいが三つほどおいてあり、またつくえの上の一輪ざしには、いつもお花がさしてあります。

ほんとに感じのいいおへやなので、いつまでも居たくなります。

わたしたちは、よくここで動物のお話を聞いたり、学校のしゅくだいをおそわったりします。

この間、わたしのたんじょう日に、石川さんをおまねきしました。

おかあさんが、

「きぬ子がいつもおじゃましてごめいわくでしょう。あなたがしんせつにしてくださるので、すっかりお友だちにしてしまって、申しわけありません」。

とおっしゃると、

「いいえ、こちらこそ、たびたびごちそうをいただきましてすみません。わたしは子どもずきですから、よろしかったらいつでも来させてください。べつに何にもできませんが、勉強のお相手ぐら

いならできますから」。

「ごしんせつにおそれいります」。

「それから、こんどの日曜日には、明君たちとハイキングに行くやくそくなんですが、よろしかったらきぬちゃんもいっしょにいかがでしょうか。ぼくも、自分の研究していることでちょっと調べたいこともあるものですから」。

このお話をきいて、わたしは大よろこびで、

「おかあさん、わたしも行っていいでしょう。行かしてね。石川さん、わたしもつれて行ってくださいね。お友だち二、三人さそって来ていいでしょう。お願いね。ハイキングってどこへ行くの」。

とやつぎばやに話しかけると、

「おかあさんからおゆるしが出さえすれば、何人でもつれて行ってあげますよ。場所はべつにどこというあてもないのだがね。林の中をあちらこちら、気の向くままに歩きながら、もうかなりやって来ているはずのわたり鳥を観察して来ようかと思っているのです」。

「小鳥のことなら、わたしたちも一学期に少しおならいしたし、もっと知りたいこともありますから……」。

「ええ、いいですよ。そのかわり少し遠く歩きますからね。よわねをはいちゃだめですよ」。

石川さんは、おとうさんとしばらく話して帰られました。

おとうさんはあとで、

「いまごろめずらしい学生さんだね」。

とおかあさんとふたりで感心していらっしゃいました。

ハイキング

わたしは、ゆり子さんととし子さんをさそいました。ふたりとも、おゆるしが出て大よろこび。それから男の方は大川さんと、中島さんのふたり、みんなあわせて六人ということになりました。

金曜日の夜、わたしたち五人は、石川さんのおへやに集まって、いろいろの相談をしました。

まずハイキングの目的地をどこにするかということでしたが、小鳥の観察という目的もあるので、なるべく人家からはなれた林から

林、おかからおかへと歩いてみようと
いうことになりました。
石川さんはつくえのひきだしから何
まいかの地図をだして、調べていらっ
しゃいましたが、
「このあたりがいいだろう。きょ年も
ちょうど今ごろ行ったが、とてもよ
かったよ。おか、林、川、果じゅ園
などあっておもしろいし、小鳥もい
る、秋の花もたくさんさいているから」。
みんなは、それにさんせいしました。そして、その地図に顔を寄

せ集めて、細かい説明を聞きました。わたしたちはまだよく地図が
読めませんが、石川さんは、地図を見ると、すっかり、土地のよう
すが頭の中にうかんでくるらしいのです。
土曜日の天気予報では、日曜日は、朝のうち、うすぐもり、後、
秋晴れのよいお天気、気温は二十二、三度ぐらいということでした。
日曜日朝七時半、岩本さんの家の前に五人が集まりました。かる
い身じたくをして、リックサックをしょっています。みんなの気が
はずんで、そこらをとびまわるので、リックサックのすずがチリチ
リと小きざみに鳴っています。
やがて私たちは、こう外電車に乗り、一時間ほど走って、春川と

いう駅におりました。駅の時計は、ちょうど九時をさしていました。

石川さんは、リックサックから、そうがん鏡を出して、くびにかけながら、

「さあ、みんな元気に歩くんだよ。お昼前に、少しがんばって歩かないと、帰りがおそくなるからね」。

大川さんが先頭に立って歩きだしました。空はだんだん晴れて来て、ひときれの雲もない上天気になりました。心がはずんでつい歌でも歌いたくなるような、晴々とした気分です。

駅前から、しばらくの間は、店が多く、人通りも多いのですが、少し歩くと、すっかりいなか道になりました。農家の庭先には、はげいとうが火のように色づいています。黄色く実ったいねのほが、

重くたれています。たんぼの中には、こっけいなかっこうをしたかかしが、立っていたり、両方からひもでひっぱられた、たこのようなものが、風にふかれて上下に大きく動いていたりするのが、わたしたちをめずらしがらせました。でもすずめたちは、平気なもので、あちらこちらと、かって気ままに飛びまわっています。

道はやがて林の中へはいりました。木は、大部分がくぬぎだということでした。くぬぎの葉は、茶色にかれて、からからと風に動いています。わたしは、くぬぎの根かたで、むらさき色の花を見つけました。

「石川さん、この花ききょうでしょう」。

「そう、ちょっとききょうに似たところがある

ね。だがそれはききょうじゃなくて……。
だれか知ってる」。
「……」
「だれも知らないの、四年生にもなっておかしいな。これ、りんどうさ」。
「あ、りんどうってこの花ですか。ちょっとさびしいが、いい花ですね」。
「秋空のようなこのこいむらさきと、ちょっとぶあつい、しっかりした葉がいいね」。
「持って帰ってだいじょうぶかしら」。

「そうね、ていねいに紙につつんで、リックに入れておけばいいかもしれない」。
林の中にも秋の日がさしこんで明かるい。すすきのほが、風に光ってみえ、秋の深くなったことを感じさせます。
わたしたちは、小高いおかの上に登ってひと休みしました。りんどうや野ぎくがあちこちにさいています。まんじゅしゃげ、おみなえしなどの花もおそわりました。そのとき大川さんがとつぜん、
「あ、富士山があんなに近く見えるよ。石川さん、そうがん鏡をかしてください」。
と言って、富士山を見始めました。富士山は、いつものすっきりしたすがたで、青空にそびえています。石川さんが、

「雨あがりなのか、じつにきれいに見えるな、もう雪が来ているね」。

わたしたちが、かわりばんこにそうがん鏡にうつる富士山を見ていますと、石川さんが、

「あれは、わたり鳥のむれではないかな」。

とおっしゃってそうがん鏡を手にとると北の空を見始めました。わたしたちも、いっせいにそちらの空に目をうつしました。すると、そこには、ちょうどごまつぶをまいたような、黒い点の集まりが見えました。

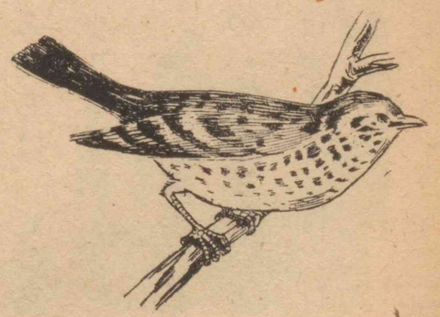
「わたり鳥だね。こちらへ飛んで来るらしい」。

「何鳥ですか」。

「たぶんつぐみだろう……。ああたしかにつぐみだね。さあみんなでじゅんばんに見てごらん」。

わたしたちは、かわりばんこにそうがん鏡で、つぐみのむれを見ました。つぐみたちは、どの鳥も大きくはばたきながら、上になり下になり、だんだんこちらに飛んできました。何百ぱという数です。はねの色だとか、からだのかっこうは、よくわかりませんが、すずめよりは大きく、はとよりは小さい鳥のようです。大川さんが、

「つぐみは、どこからわたって来るのですか。」
とたずねると、
「つぐみは、大きなむれを作り、シベリヤから日本海をこえて飛んで来て、冬中日本に住む冬鳥だね。」
すると中島さんが何か思い出したように、
「ああ、あのシベリヤからですか。秋来る鳥では、つぐみはいちばん早いのですか。」
「いや、もうとっくに来ている鳥もいるよ。きみたちの知っているもずなど、あまり遠くへは行かないが、秋になると人ざと近くにやって来る。でもいろいろなわたり鳥がやって来るのは、これか



らだね。かも、がん、まひわ、しろはら、それに南の九州には、つるがやってくる。この向こうに小さいぬまがあるが、そこには冬になると、よくかもが泳いでいる。」
「わたり鳥ってふしぎですね。あんな小さいからだで海の上を何千里も飛んで来るのですから。」
「そうだね。でも、このごろはわたり鳥の研究が進んだので、いろいろのことがわかってきた。わたり鳥が大旅行をするのも、人間が考えているほど、たいへんなことではなさそうなんだよ。」
つぐみのむれは、わたしたちの頭の上を通って、南の空へきえていきました。わたしたちは、また歩きだしました。少し歩くとあせばむほどのあたたかさです。農家のかきがまっかにうれて、たくさ

んなっているのが目をひきます。わたしたちは、いくつかのおかをこえ、すすきや、小ざさの中を歩いて、前よりももっと見はらしのいい小山に登りつき、そこでおべんとうを食べることにしました。

六人は輪になってすわりました。もって来たものをリックから出して、みんなの前にひろげ、だれがどれを食べてもいいことにしました。石川さんは、地図を開いて、駅からここまで歩いた道に赤えんぴつで線を入れながら、地図の見方を教えてくださいました。

ごはんがすむと、りんごを食べたり、おかしを食べたりして話しました。秋草の中にねころんで空をみると、どこまでもすんだ空に、白くすきとおった雲が、静かに流れています。こうしてきれいな空気をすっていると、からだの中まであらわれるようないい気持です。

およそ一時間半ばかり、歌を歌ったり、とびまわったり、木登りをしたりして、遊びました。わたしたちが「野ぎく」を歌っていると、石川さんが、

「いい歌だね、ぼくにも教えてくださいよ。」

とおっしゃいました。

それから、またくぬぎや赤まつの林を通りぬけ、おいもやだいこん畑のそばを歩いて、野田川のほとりに出ました。川原の小石が白くかがやき、さざなみがキラキラとまぶしいほどです。中島さんがまっさきに川にかけおりたかと思うと、すぐに石をひろって投げました。石は川せの中ほどに落ちました。続いて大川さんも投げました。やがてふたりはリックサックをおろして、おたがいに本気でき

ようそうを始めました。ふたりとも野球ずきですが、石はなかなか向こう岸にとどきません。ゆり子さんが、

「石川さん投げてごらんなさい。」

と言うと、石川さんも、小石をひろって投げました。石は、小さくなるまで向こうに飛んで、ずっと遠くの草の中にカチリと音がして落ちました。ふたりは、

「すごいなあ。」

と感心して、また何回も投げています。やっと、中島さんのが向こう岸の水ぎわに落ちました。

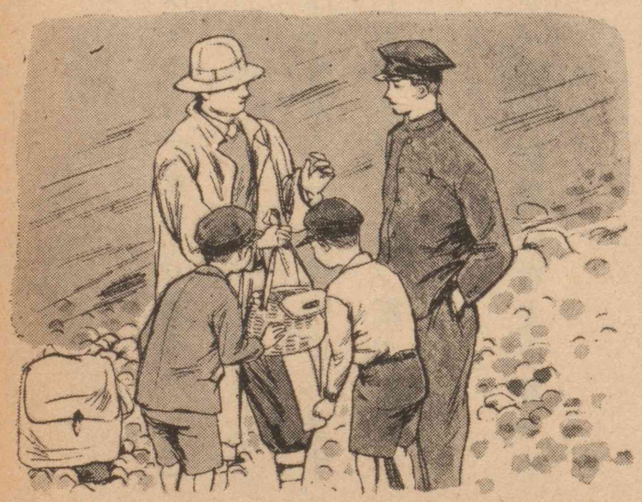
そのうちに石投げをやめたふたりは、川上でつりをしている人の方へ走りました。わたしたちは、美しい小石をさがしてひろいました。ふたりが手まねきをするのでかけていきますと、つりのおじさんがかごの中のさかなをみせてくれました。かごの中には、五、六ぴきのあゆが泳いでいました。石川さんが、

「もう落ちあゆですね。」

とたずねると、

「そうです。いまがあゆのふとりきったところですね。」

とおっしゃって、かごを水からあげて見せてくださいました。二十センチから二十二、三センチもありそうな大きなあゆがぴちぴちとはねています。



わたしは生きたあゆを見るのは初めてでした。

しばらく遊んで川からあがり、つつみを歩いて果じゅ園の方へ行きました。

えだを横にひろげて、たなのように作ったなし畑が続いています。葉はもう黄ばみ、実はほとんど取ってしまって、からの紙ぶくろがかさかさ動いています。

わたしたちは、一けんの農家によって、二十世紀のなしを買っておみやげにしました。

日は少し西にかたむいたのか、もののかげが長くなってきました。ここからも、おかや林の向こうに富士山が見えます。

わたしたちは、予定通り、この近くの駅で帰りの電車に乗りました。

た。電車はすいていて、みんなこしかけることができました。電車の中で、中島さんが、

「さっきの落ちあゆというのはなんですか。」

ときくと、

「あゆは、春、海から川にのぼって来て、秋の終りに海に帰るのだよ。川から海に帰るあゆが落ちあゆさ。」

「それでは、あゆもわたり魚ですね。」

と言うと、石川さんはわらいながら、

「わたり魚は、おもしろいね。ほかにも場所をかえて住む魚がいろいろあるよ。」

そばから、とし子さんが、

「さけもそうでしょう」。
と言うと、
「そうです。よく知っていましたね」。
こんなことを話しているうちに、電車は人家のこんだ町の中へ走りこんで、車内の人もだんだん多くなって来ました。
わたしたちは、秋の一日、楽しいおもしろいハイキングをすませ、石川さんに「さようなら」をして、それぞれのおうちへ帰りました。
時計は、午後四時ちょっと前でした。

心を打つ話

みなさんも、きっと一つや二つ、いつまでも心の中にしっかりととめておきたいようないい話を、聞いたり、読んだりして、持っていることと思います。そんなよい話に動かされ、その人の生活が大きく変わっていったなどという話も、よく聞くことですね。
ここには、アメリカで、たいそうすぐれた研究をした、野口英世博士のことと、あるえい画館で起こったできごととの、二つのお話をのせてあります。
もし、この二つの話がみなさんによく読まれ、みなさんの心の底にひびき、みなさんが、いつまでも心の中に持っていてくださるなら、この上もないうれしいことです。

(一) 野口博士のつくえ

一九四〇年の春、そのころニューヨークにいたわたくしは、野口英世博士の夫人に、こんな手紙を送りました。

「わたくしは、はるばる遠い日本から、アメリカに勉強に来ている者です。わたくしは、日ごろから野口博士をうやまっています。博士が生きておられたころのごようすをおうかがいしたいと思いますので、お目にかからせていただけませんか。」

すると、まもなく返事が来ました。

「お手紙を、うれしくいただきました。あいにく、わたくしは今病

気でねていますので、お目にかかることができません。お手紙をいただいてすぐに、ロックフェラー医学研究所に電話をかけておきましたから、そこのブラウン博士をたずねてごらんなさい。きっとしんせつに、野口のことについて話してくれるでしょう。」

わたくしはさっそく、ニューヨークにあるロックフェラー医学研究所に、ブラウン博士をたずねました。博士は、にこにこしながらげんかんにでむかえてくださって、

「あなたのおいでになるのを、お待ちしていました。さあどうぞ。」

と、おうせつ室に通してくださいました。

ブラウン博士は、野口博士とは、とくべつ親しいあいだがらだったようで、野口博士が生きていらっしゃったころを思いだしながら、

いろいろ話をしてくださいました。野口博士はひじょうに勉強家で、いちど研究にとりかかると、食事もわすれて研究を続けたということ。つぎからつぎへと大きな研究を発表して、ほかの学者をおどろかしたということ。ロックフェラー研究所長のフレキシナー博士から、とくべつに信用されていたということ。ウィーンで開かれたさいきん学（ばいきんを研究する学問）の大会には、三十八オのわかさでアメリカを代表して出席したということ。その時ウィーンの新聞は、これを大きくとりあげて、博士のてがらをほめたたえたということ……。それからそれへと、話はなかなか終りそうにもありませんでした。

その話のあとで、研究所の中を見せてもらいました。初めにあん

ないされたのは、参考図書館です。大きさとしては、おどろくほどではありませんでしたが、黒の大理石をしきつめた、おごそかな感じのする図書館で、たなには、だいじな医学の参考書がぎっしりつまっていました。

へやの四すみには、大きな台があって、その中の一つだけにきょう像が、すえられてあります。それを見たとたん、わたくしは思わず、「ああ、これだ」と、ひとりごとを言ってしまいました。それは、わたくしが日本にいた時、くりかえしくりかえし読んだ「野口英世」という本の初めにでてくる写真のきょう像だったのです。博士は、

「この四すみの台には、この研究所でいちばんりっぱな研究をした人のきょう像をおくことになっています。が、いまのところ、野口博士のほかにはないのです」。

と説明してくださいました。

野口博士は、ふくしま県のおきなじまというかたいなかの、びんぼうな家に生まれました。小さい時に、やけどで左の手をきかなくしてしまいましたが、そのころアメリカから帰ったある医者の力で手術をして、いくらかよくなりました。博士はこれに感げきし、医者になろうとこころざして、まず東京に出て苦学をしました。さらにアメリカにわたって、ペンシルバニア大学で勉強した後、はいったのがこのロックフェラー研究所なのでした。

ここは、アメリカきっての医学者が集まるところなのです。ここにはいれたということだけでも、日本人として、大きなめいよだったのです。ところが博士のめいよは、それだけではありませんでした。所長のフレキシナー博士は、野口博士のすぐれた医学の才能と、研究の熱心さに感心して、数多い研究所の学者の中から、とくに野口博士を選んで、デンマークの国立血清学研究所長マドセン先生のもとに留学させました。デンマークから帰った博士は、ロックフェラー研究所で、りっぱな研究を続け、一九一三年のころには、アメリカだけでなく全世界に、その名が知れわたるようになりました。それから一九二八年五月二十一日、黄熱病の研究にでかけたアフリカで、しかもその病気でたおれるまで、かずかずのとうとい研究を

なしとげたのでした。

わたくしは、ブラウン博士のお話で、先生がそれほどまでにえらかったのかと、いまさらのようにおどろきました。そして、わたくしがアメリカに来てから、大学の先生や、市の図書館の受付の女事務員や、公園でであった労働者など、いろいろな人から、野口博士のことをたずねられたのを思いおこしました。

図書館の見学がすむと、ブラウン博士は、左の方に高くそびえている研究所の建物へあんないしてくださいました。

「野口博士のおられた研究室は、この建物の中にあります。けれども、ここはさいきん学の研究所なので、ふつうの人ははいることができません」。

そう言われると、わたくしは、いっそうその記念の研究室が見たくなりました。

「なんとか、中を見学することはできますまいか」。

博士は、わたくしの熱心さに動かされたのでしょうか。かかりの人にたのんでくれました。

「日本のお客さまですから、とくべつにゆるしてもらいました」。

わたくしは、どんなに喜んだかしれません。入口で、白のうわぎを着、くつにカバーをつけて、三階にのぼりました。野口博士が居られたというへやの前に立った時にはむねがどきどきしました。

へやの中では、何人かの学者が、しんけんな顔つきで、けんび鏡をのぞいて研究しています。ところがそのへやのまどぎわのところ

に、大きなつくえといすがおいてありましたが、だれも使っているようなようすがありません。すると博士が、そのつくえといすを指さして、

「あれが、野口博士の使っていたつくえといすです。野口博士をいつまでも記念するために、だれも使わずに、とってあるのです」。

わたくしは、電気でもかけられたように、きんちょうしました。野口博士は、このつくえといすとで、毎日研究を続けられたのがしら。朝早くから、夜おそくまで、このつくえに向かっておられたのかしら。世界の学者をおどろかすような大研究を、このつくえでなしとげられたのかしら。アメリカの医学を世界にしょうかいした研究も、このつくえでなされたのかしら。アメリカの人たちに、日本

の名を深くきざみこんだのも、このつくえの上での研究であったのかしら。

そう考えると、この古めかしいつくえといすとが、光りかがやいて見えました。またとないたからもののようにも見えました。心もからだも、しばらくはこのつくえといすにすいつけられてしまいました。

感げきしたわたくしは、ブラウン博士にあつくお礼を言ってこの研究所を出ました。

(二)　くらやみの合唱

そうですね。これは、もう、かれこれ三年ほど前のことですが、いつ思い出しても、わたしの心を明かるくしてくれます。ひとりでしまっておくのは、もったいないと思って、何人かの人にも、話しましたが、聞いてくださった方も、みんな、「それはほんとにいいお話ですね」。と感心してくれました。

そのころは、わたしの住んでいる町でも、よく停電があって、不自由したものでしたが、その日は、停電日でなかったので、早めに

夕飯をすますと、久しぶりに、えい画を見にでかけました。

館内はもう「おすな、おすな」の満員でしたが、わたしは運よくスクリーンのすぐ前に座席を見つけることができました。

そのうちに、えい画が、始まりました。しかし、ものの十五分もたつかたたないうちに、ぱたりと画面が動かなくなったと思うと、館内は急にまっくらやみとなってしまいました。いそがしい仕事をやりくりして見に来たわたしは、ひどくがっかりしました。

まったくいじわるな停電です。だれも同じ気持なのでしょう。やがて館内のあちこちから、した打ちや、不平の声が起こり、それがしだいにひろがっていきました。

ところがしばらくすると、

「みなさま、まことに申しわけございませんが、三十分間の停電でございます。どうぞしばらくお待ちくださいませ」。

と、わかい女の人の声が聞こえてきました。

この声を聞くと、満員の観客は、さらに大きくざわめきたちました。その日は、前から送電日だとわかっていたのですから、いっそう不平が大きかったのでしょう。

すると、その時です。まったく思いがけなく、まっくらなやみの中から、きれいな口ぶえで、聞きおぼえのある「トルコ行進曲」をふきだした者があります。どこか遠いところから聞こえてくるような美しいリズムは、さざなみのように館内にひろがってきました。だれかが、するどく「しっ、しっ」とさわぎをおさえました。わた

しも思わず「しっ、しっ」と、ざわめきを静めずにはおられませんでした。館内が静かになってくるにしたがって、よくそろった「トルコ行進曲」は、さらにはっきり、美しく聞こえてくるのです。

わたしは、すっかり、そのたくみな口ぶえにひきつけられました。リズムにしたがって、足さきは軽くゆかをたたいています。あれほどざわめいていた館内は、いつの間にか、しいんとしずまってきましたので、口ぶえはいっそうきれいに館内にひびきました。

やがて、その「トルコ行進曲」が終り近くなった時、こんどは、英語で「聖夜」の、静かな美しい合唱が流れてくるではありませんか。わたしはすっかりうれしくなってしまいました。

「聖夜」のよくそろった美しい歌声は、館内いっぱいにひろがって

います。
「だれだろう」。
とみんながささやき始めたころ、わたしの近くにいただれかが、かい中電燈で歌の主をさがし始めました。わたしの目も、光の動きを追っています。と、その光は、二階の正面でぴたりととまりました。そしてその光の中に見いだされたのは、なんと、七、八人の外国の兵隊さんではありませんか。
「外国の人だ、外国の人だ」。
こうわかると、館内あちらからも、こちらからも、われるようなはく手が起りました。もちろんわたしも、みんなにまじって、うれしいはく手を送りました。

もうこの時には、今までの不平やためいきはどこかへふっとんでしまって、楽しいリズムに人々の心は明かるくほおえんでいました。
そのリズムが終ると、とつぜん、これも私のちょっと後にいた学生さんらしい方が、大きい声で、
「どうかもう一回聞かせてください。」
と、英語でお願いをしました。すると、すぐに、
「オーケー・オーケー」
という返事があり、やがて歌いだされたのは、「スワニー・リバー」の合唱です。わたしはもうすっかりおどろいてしまいました。歌のじょうずなことはもちろんですが、いつどこでも、このように正しく美しく気軽に歌うことのできる音楽の力と、そののびのびとした

気持です。まったくうらやましくてなりません。
聞いているうちにわたしもいっしょに歌いたくなりました。いいえ、わたしだけではありません。くらやみの中には、もう、この人たちの声にあわせて歌いだしている人もあります。
見も知らない外国人と、日本人が、くらやみのえい画館で合唱しているなんて、それはまるでゆめの世界ですね。
すると、こんどは、まただれかが、
「日本の歌を歌ってください。」
とたのみました。
「オーケー」
二つ返事で歌い始められたのが、なんと「お手々つないで野道を

いけば」の童ようなんです。ことばはぎこちないですが、ふしはたしかなものです。館内は、またわれるようなはくしゅのあらしです。
ところが、さらにおどろいたことは、その方たちの中のひとりが
「コンド、ボク、コウジョウノツキ　ウタイマス。」
と、はっきりした日本語で言うのです。いく本かのかい中電燈の光が、この兵隊さんに集まりました。光にてらし出された兵隊さんはまぶしそうな目をして、くらやみからわき起るはくしゅにこたえて、あいきょうたっぷりにあいさつをしました。
「こうじょうの月」が歌いだされました。しっかりとしたひびきのある声、それに、ふしの上がり下がりもたしかなもので、日本人でも顔まけするくらい、じょうずな歌い方なのです。館内は水をうっ

たように静かに聞きいりました。

歌が終った時、わすれていた電燈がぱっとつきました。まるでゆめの世界からさめたようです。人々は兵隊さんたちに、はくしゅと、「サンキュー、サンキュー」。のことばを送って心から感謝しました。

停電で大きくなろうとしたくらやみのさわぎが、この思いがけない合唱で、すっかり楽しいものになってしまいました。

「さっきのこうじょうの月、よかったね、もう一度聞きたいわ」

「口ぶえだって、すばらしいね」

「えい画よりもかえってよかったじゃないか」

などと話して帰る人々の声を聞くと、みんなの感げきも、わたしと同じであることがわかりました。

ことばの表

○あいだがら……一〇五
あかえんぴつ……九六
あかだすき……三五
あかまつ……九七
あきやませんせい……一七
あけぼの……五
あさがお……七五
あざやか(な)……五二
あしあと……七六
あせばむ……九五
あつい……一四
アフリカ……一〇九
あめあがり……九二
あゆ……九八
あらし……三三
あるいは……四二
あんがい……二〇
あんぜん……一〇九
あんない……二九
○いい(ですよ)……一一〇
いくえ(にも)……八四
いくところ(も)……三六
いごこち……三
いしだ(さん)……二九
いしなげ……一六
いしゃ……九八
いじょう……一〇五
いしょく……九六
いちがっき……二九
いちごう……一〇
いちばいはん……二七
いちりんざし……二三
いっき……八
いっしょう……七〇
いっしょう……三〇
いなか……四二
いなさく……五六
いね……五六
いのこったり(いのこる)……一〇
いまさら……一一〇
いもうと……三三
いろづいて(いろづく)……八八
いわもと(さん)……八〇
○ウィーン……一〇六
うえ(うえる)……一八
うえまさ……二九
うけつけ……一一〇
うけもち……二七
うすぐもり……三三
うずめる……八七
うたれた(うたれる)……二四
うっとり(と)……一六
うたごえ……四三
うちだして(うちだす)……三八
うやまって(うやまう)……一〇四
うれて(うれる)……九五
うわぎ……一一
うんどうか……五〇
うんどうかい……三
○えきまえ……四三
えんそく……三
えん(のとおい)……四七
○オーケー……一九
おいも……九七
おうせつしつ……一〇五
(てに)おえない……一三
おおいに……六三
おおさわぎ……二三
おおぜい……三三
おおばん……六〇
おきなじま……一〇八
おけしょう……三三
おごそか……一一〇
おしきって(おしきる)……一七
おちば……四〇
おつきさま……七六
おてて……三三
おび……一一〇
おまねき……三三
おみなえし……一七
おもうぞんぶん……九一
おもいおもい(に)……三五
おもわず……三三
おゆるし……三一
おりかさなって(おりかさなる)……三
おんなじむいん……一一〇
○かいぐい……一六
かいせん……三〇
かいちゅうでんとう……六
かおまけ……一八
かかし……三三
かかり……九
かけら……二二
かしだしちょう……三
かじゅえん……六七
かそう……六六
かたすみ……三三
かだん……五
がっきゅうぶんこ……一八
がっしょうたい……四
かってきまま……六七
かなあみ……六九
かなり……一七

カバー……二一
かぶ……一三
かぺしんぶん……一八
かみぶくろ……一〇〇
かも……九五
がらくた……六
かわいがって(かわいがる)二六
かわせ……九七
かわりばんこ(に)……九二
がん……九五
かんきゃく……一〇六
かんげき……一〇八
かんさつ……五二
かんじ……七四
かんした(かんする)……四九
かんしん……二
かんそく……二七
かんたん……七五
がんばって(がんばる)……二
かんばんや(さん)……一八
○きおん……八七
きを(きかして)……一三
きがる(に)……一九
ききょう……八九
ぎこちない……三三
きざみこんだ(きざみこむ)二三
きじ……二四
きっかけ……六四
ぎっしり……二六
——きった……九九
——きって(の)……一〇九
きぬぬきって……五五
きのどく……四六
きのぼり……九七
きふ……一八
きぼう……一七
きもの……三三
きゅうしゅう……九五
ぎょうじ……三一
きょうぞう……一〇七
きょうだい……四八
きょうどうぼきん……四一
きよかわ(くん)……八
きりぬき……七五
かんじた(かんする)……四九
——きれない……四八
きんじいさん……五五
きんちょう……二三
きんぽうげ……五七
○くがく……一〇八
くさき……五二
くずや……七四
くちぶえ……二六
くっきり(と)……五四
くぬぎ……八九
くばります(くばる)……五三
くらしき……二七
くらやみ……二四
グランド……一〇
くるしい……四〇
グローブ……七〇
くろう……四六
○けい……一七
けいじばん……一八
けっか……二四
けっこう……二六
げひん……六六
げんかん……一〇五
けんぶつにん……三七
けんやく……四八
○コーチ……七〇
コウジョウノツキ……三三
こうつうあんぜん
しゅうかん……六
こうねつびょう……一〇九
こかげ……一八
こきざみ……八七
こくりつけっせいがく
けんきゅうしょ……一〇九
ごご……三〇
こころざし……一〇八
こころぼそく
(こころぼそい)……四五
こずえ……五五
コスモス……四二
ごぞんじ(の)……三四
ごちそう……五〇
ことし……九八
ことしけい……一八
ごまつぶ……九二
ごみすてば……一三
ごめいわく……八二
こんちゅうずかん……六五
○さいえん……八
さいきんがく……一〇六
さいしょ……一六
さいのう……一〇九
さぎょう……一〇四
さけ……一〇三
ざざなみ……九七
ざせき……一二五
さそって(さそう)……一九
ざっそう……六
ざわめいて(ざわめく)……一二七
サンキュウ……一三三
さんこう……四一
ざんねん……四六
さんばい……三〇
さんぶんのいち……一二
○シーソー……一七
しあい……一〇
しあげ……一三
しごと……一九
しじゅうから……五四
じしん……五
しずおか……一七
しずく……五四
しせい……三六
したうち……一二五
じちかい……六二
じつげん……一六

しっぽ……五六
しつらえて(しつらえる)……一八
じてんしゃ……四二
じならし……一四
シナリオ……五九
シベリア……九四
しめきった(しめきる)……一〇七
しゃしん……五九
しゃない……一〇二
じゅうすうにん……二六
しゅうぜん……五五
じゅうぶん……三〇
しゅうくだい……八二
しゅじゅつ……一〇八
しゅっしん……四七
しゅっせき……一〇六
しゅもく……三一
しょうかい……一二
しょうがくせいよう……六五
じょうかん……四一
じょうきょう……四五
じょうげ……八九
じょうじょう……三一
じょうてんき……三三
じょうひん……八八
しょうめん……三一
しょくじ……一〇六
しょだな……六六
しょちょう……一〇九
じりじり……一四
しろはら……九五
しんいいん……六二
じんか……八四
しんじ(くん)……四一
しんせき……八〇
○すえつけた(すえつける)一七
すえる……一〇七
すくわれる(すくう)……四五
ずしり(と)……一四
すずかぜ……二六
すそ……三七
すなば……一七
すべりだい……一七
すみずみ……四二
すもうとり……三三
するどい……六六
スワニー・リバー……一二九
○せいせき……三〇
せいとん……六五
せいねん……八〇
せいや……一二七
せいり……六七
せきざい……三三
せっけいず……三三
せつめい……五一
せん……九六
ぜんいん……一四
ぜんこく……四一
ぜんじつ……八八
せんとう……一二
○そうがんきょう……五一
そうだん……三三
そうでんぴ……二一六
それっきり……八
ぞんぶん(に)……三四
○——たい……一〇
だいいっぽ……三三
たいがい……六二
たいがく……八〇
たいくつ……五〇
たいこ……三三
だいこんばたけ……九七
たいじゅう……六八
だいたい……六二
だいひょう……一〇六
ダイヤモンド……一六
だいりせき……一〇七
たかぎきぬこ(さん)……四一
たくみ(な)……一二七
たしかめて(たしかめる)……八
たたきおとす……二六
たちばな(さん)……八
たちよみ……二六
だっこ……八一
たてこんだ……六
たてもの……二〇
たてられ(たてる)……九
たなか(さん)……一三
たのみまっせ……五五
たぶん……二
たまご……五一
たまらなかった
(たまらない)……三三
ためいき……二九
たらしたり(たらす)……三三
——たらず……五五
○チーム……三三
ちゃいろ……八九
ちゅうがっこう……一〇
ちゅうしん……五五
ちょうない……三五
○つきみおどり……一八
つぐみ……九三
つとめて(つとめる)……五
つなぎあわせ……五九
つのる……四二
つみあげて(つみあげる)……一三
つりこ……九八
つりこまれて
(つりこまれる)……三七
○ていでん……二四
ていれ……八
てがら……一〇六
てびょうし……二六
てわけ……三三
てんいん……三
てんたいぼうえんきょう……一七
でんとう……六七
でんぽう……一九
デンマーク……一〇九

てんもんだい……一七
てんらんかい……一九
でんわ……一〇五
○どうぐ……一三
どうさ……五五
とうしゃばん……四四
とうけい……一九
どうよう……一三
どうろ……六
どくしょずき……一七
どくそう……五七
とけいや……三三
とこや……三三
とじいと……一四
としょかん……一七
どぞう……四八
とたん……一〇七
ドッジボール・コート……一六
とっぴ(な)……一四
とにかく……一三
とびこんだ(とびこむ)……一七
どようび……八
とりかご……五五
とりかたづける……一三
トルコこうしんきょく……一六
○なかにし(くん)……一七
なしとげた(なしとげる)……一〇〇
なしばたけ……五四
なないろ……一五
なまえ……一五
なりたちました(なりたつ)……一四
なるべく……六
なわとび……九五
○にしむら(さん)……一七
にしゅうかん……四五
にじゅっせいき……一〇〇
にた……九
にっき……六八
にっぽんいち……一三
にっぽんかい……九四
ニューヨーク……一〇四
にゅうじょうけん……六
にわき……一九
にわさき……一八
○ぬきがき……六
ぬきとって(ぬきとる)……五九
○ねえさんかぶり……一三
ねかた……九
ねっしん……一〇
ねんいり……六八
○のうか……八八
のうがっこう……四七
のうぎょう……四七
のぐちひでよはかせ……一〇三
のだがわ……九七
のどじまんかい……三〇
のぼった(のぼる)……三五
のみち……一一〇
○ばいきん……一〇六
ばかげた……六五
はくしゅ……二四
はくせい……八一
はげいとう……八八
はける……一七
はしもと(くん)……一三
はしょり(はしょる)……三七
はしらどけい……五三
はずれ……四四
はずんで(はずむ)……八八
はたけ……一三
はちさばき……五五
ばった……六
バット……七〇
はっぴすがた……三五
はてしなく(はてしない)……一九
はと……九三
はばたきながら(はばたく)……九三
はびこって(はびこる)……七
はやした(はやす)……三三
はやめ……三三
はるかわ……八七
はるばる……一〇四
はるみ(さん)……三三
はれぼれ……八八
はんじょう……一六
はんたい……一三
はんぶん……一一
○ひがし……一六
ひきうけましょう(ひきうける)……三三
ひげ……三三
ひさしい……二四
ひじょうに……一〇六
ひっきりなし……六六
ひっこした(ひっこす)……八
ひつよう……四七
ひときれ……八八
ひとりで(に)……四〇
びょうき……一〇四
ひょうご……三三
ひょうし……七四
ひょうほん……五一
ひるやすみ……六七
ひろっぱ……七
ひろば……五
びんぼう……一〇八
○ぶいん……四四
ふうけい……四三
ふくしまけん……一〇八
ふけいかい……一〇八
ふし……三三
ふしあわせ……三三
ふじさん……九一
ふじん……一〇四
ぶたい……一八
ふだん……三三
フットボール……四六
ふでぶしょう……七九
ぶぶん……五九
ふへい……一五

ふみば(もない)……七
ふやす……六二
ふゆどり……九四
ブラウンはかせ……一〇五
ふるほん……七四
ふるめかしい……一三
フレキシナーはかせ……一〇六
○ページ……六七
へいき……九
へいたい(さん)……一六
へいほう……一二
ペンシルバニャだいがく……一〇八
べんきょうか……一〇六
へんじ……一〇四
へんしゅう……一三
ベンチ……一八
○ほうげん……七五
ほうぼう……七
ほおかむり……三七
ほがらか(な)……三七
ぼきんばこ……四三
ほねおって(ほねおる)……一九
ほめたたえた(ほめたたえる)……一〇六
ぼんおどり……四六
ぼんだせんせい……一七
ほんだな……一六
ほんまち……三〇
ほんとう……八
ほんもち……四八
ほんや……二八
○まいとし……一八
まきじゃく……三
まぎらせる……五〇
まけて(まける)……一
まじめ……六八
またとない……一三
まっくらやみ……一五
まっしろ……三
マドセンせんせい……一〇九
まとも(に)……六
まひわ……九五
まぶしそう……三三
まるい……一七
まんいん……二六
まんが……三
まんじゅしゃげ……九一
まんまるい……三
○みかた……九六
みじたく……八七
みずぎわ……九八
みちがえる……一九
みちみち……五七
みちゆく……四
みとおし……一五
みどり……二二
みのった(みのる)……八
みまもって(みまもる)……九
みみより(な)……七
みむき……五九
みもしらない……二〇
みやもと(くん)……七
みより……四三
みんせいいいん……八
○むくち……一六
むこうはちまき……三五
むらさきいろ……八九
○めいじん……三五
めいよ……一〇九
めん……三三
○もくてきち……八五
もじ……六七
もず……五五
もちだした……八
ものほしざお……二六
もりあげて……一八
もんだい……四一
もんちゅう……三
○やがいげき……一八
やけあと……六
やけど……一〇八
やっかい……九
やね……一七
やましたせんせい……六
やまのぼり……四六
やまほど……九
やりくり……二五
○ゆうだち……二三
ゆうはん……二四
ゆうびんや(さん)……四二
ゆか……二七
○ようふく……三三
よくじつ……一二
よてい……四六
よびかけて(よびかける)……一四
よぶん……二九
よほう……八七
よりあい……二九
よわね……八四
○らいねん……九
——らしく……五五
○リズム……二六
りゅうがく……一〇九
りょう……六三
りんどう……九〇
○るす……二九
○レコード……七八
れんがしゅう……一三
れんしゅう……一七
○ろうじん……四三
ろうどうしゃ……一〇
ろじ……六
ロックフェラーいがく けんきゅうしょ……一〇五
○わ……二六
わきおこって(わきおこる)……五
わたしゃ……七三
わたりどり……五九
わらいばなし……二六

Copyright 1950, by
The Kyōiku Tosho Kenkyūkai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

小国 418

四年生の国語 中

Approved by Ministry of Education
(Date 1950)

感謝

左の作品を本書に掲載させていただきましたことについて、著作者諸先生に心から感謝をいたします。なお、規則や指示にしたがつて多少加除訂正のやむをえなかつたことについて御諒解をお願いいたします。

赤いはね……村野四郎

編者

東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長 東京高等師範学校教授 佐藤保太郎
担当執筆者 東京高等師範学校教諭 田中豊太郎
〃 〃 〃 〃 花田哲幸
〃 〃 〃 〃 青木幹勇
〃 〃 〃 〃 森下巌
〃 〃 〃 〃 小島忠治
表紙 田原輝夫
さしえ 大槻定雄

印刷 昭和二十五年 月 日
発行 昭和二十五年 月 日 定価 円

著作者 財団法人 教育図書研究会 会長 務台理作
発行者 学校図書株式会社 代表者 川口芳太郎 東京都港区芝三田豊岡町八番地
印刷者 図書印刷株式会社 代表者 川口芳太郎 東京都港区芝三田豊岡町八番地
発行所 学校図書株式会社 東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無断発行を禁ずる。

漢字の表

務 110	州 95	治 61	転 42	種 31	編 23	望 17	期 10	焼 6
停 114	千 95	改 61	景 43	標 32	結 24	鏡 17	終 10	全 6
飯 114	泳 95	姉 66	老 43	勢 33	果 24	根 17	試 10	雑 6
久 115	紀 100	整 67	予 46	帯 33	謝 24	植 18	対 10	投 6
軽 117	夫 104	理 67	定 46	仮 33	測 27	寄 18	柱 13	練 7
聖 117	医 105	唱 67	労 46	利 39	開 28	付 18	具 13	習 7
兵 118	問 106	漢 75	必 47	続 40	余 29	展 19	業 14	寺 7
	席 106	券 76	要 47	共 41	移 29	願 19	暑 14	清 8
	県 108	階 81	関 49	庫 41	戦 30	熱 20	陽 14	民 8
	能 109	的 85	短 49	(巻) 41	敗 30	放 22	働 15	委 8
	血 109	温 87	毒 57	参 41	績 30	設 22	現 16	菜 8
	留 109	富 91	選 61	供 42	兄 31	登 23	希 17	建 9

庫
50
770
広島大学図書
0130449770

おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書から
より良質のもの（新教科書用紙）を使
用することになつて居ります。